効果的な学習支援事例の共有による
実習指導者と教員の協働リフレクション
―地域看護学実習報告会における試み―

田中美延里，入野　了士，窪田　志穂，長尾　奈美，野村美千江

愛媛県立医療技術大学紀要 第14巻 第1号抜粋

2017年12月

愛媛県立医療技術大学紀要
第14巻　第1号　P.27-34　2017　　資　料（査読なし）

効果的な学習支援事例の共有による実習指導者と教員の協働リフレクション ―地域看護学実習報告会における試み―

田中美延里*，入野　了士*，窪田　志穂*，長尾　奈美*，野村美千江*

Collaborative Reflection of Clinical Practitioners and Teachers Through Sharing Cases of Effective Learning Support at a Clinical Practice in Community Health Nursing Conference

Minori TANAKA, Satoshi IRINO, Shiho KUBOTA, Nami NAGAO, Michie NOMURA

Key words：実習指導者　リフレクション　協働　学習支援事例　地域看護学実習

序　　文

看護基礎教育の臨地実習において，学生一人ひとりがのびのびと経験できる教育環境は教員の力だけで整えられるのではなく，実践現場の看護職との協働によって作り出される[1)]。行政機関における実習では，家庭訪問や健康診査，集団健康教育などの事業参加を通して学習するため，学生が地域へ出向く保健師に同行する場面がある。教員は同時期に複数の施設を巡回して実習指導を行う場合が多く，臨地の保健師との協力体制がより重要となる。

本学の地域看護学領域では，開学当初から実習終了後に学内で指導者対象の実習報告会を開催し，実習の成果報告や課題の検討を行ってきた。平成27年度からは実習指導経験の意味づけを重視し，実習報告会において効果的な学習支援事例を共有する機会を設けている。これは，複雑で不確実な状況に対応可能な実践的思考として看護において注目されるリフレクション[2)]を，複数人が一堂に会して実施する方法[3)]の一例である。

本稿では，地域看護学実習報告会における実習指導者（以下，指導者）と教員の協働リフレクションの背景と試みの実際について報告する。

地域看護学実習の概要

1．実習目的と実習方法

本学のカリキュラムは，平成24年度入学生から保健師教育選択制（定員30名程度）に改正された。地域看護学実習は３年次後期必修４単位から２単位に変更となり，保健師選択者は４年次に公衆衛生看護学実習３単位を含む選択科目の履修により保健師国家試験受験資格を得る教育課程となった。

平成26年度から新カリキュラムによる地域看護学実習を開始した。実習目的は，ヘルスプロモーションの理念を基盤に保健所・市町村における保健医療福祉活動の実際を通して，地域住民の健康レベルの向上をめざす看護活動の方法・技術を学ぶことである。

実習フィールドは愛媛県内の全保健所（県６，中核市１）および管内市町で，各市町２～４名の学生グループを編成し，１クール２週間の実習を実施している。学生は保健所や市町保健センター・支所等を拠点に地域へ出向いて学習するため，遠隔地は宿泊を伴う実習である。県下20市町のうち平成26年度は17市町で，平成27～28年度は18市町で実習を行った。

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

2．実習における学習の焦点

地域看護学実習における学習の焦点は，実習目標に対応させた①個別支援としての家庭訪問，②みて・きいて・つかんだ地域の姿，③保健事業と住民の声，④保健師の専門性である。日々の実習体験を振り返って考察する以外に，以下の２つの課題を設けている。

i. グループの課題として，既存資料・地区踏査・インタビューから「みて・きいて・つかんだ地域の姿」を作成し，チームプレゼンテーションを行う。

ii. 個人の課題として，「保健師の専門性」の観点で印象に残った場面を意味づけ，保健師活動の方法・技術として抽象化した内容をピアレビューする。

地域看護学実習において，学生は住民目線に立ち，各種保健事業を社会資源として理解し，地域特性，住民の生活，健康を関連付けて，地域の望ましい姿を考察する[4)]。

3．実習指導体制

実習担当教員は１クールに１〜２の実習グループを受け持ち，各グループの実習計画に合わせて，保健所，市町保健センター・支所等，複数の実習施設を巡回して指導を行う。

実習フィールドの指導体制は，保健師分散配置の影響を受けて複雑化している。指導者は，県保健所では企画課保健師であり，主にオリエンテーションに関する他課との調整や管内市町の実習調整および指導者の支援を担う。一方，市町では実習受け入れ部署によって指導体制が異なっている。本庁保健部門（保健センター）の保健師が指導者となる場合もあれば，支所での実習受け入れに伴い支所保健師に加えて本庁保健部門（保健センター）の保健師が全体調整を担う指導者となる場合がある。また，中核市では保健所保健師または事務職員を調整窓口とし，校区担当保健師が指導者となっている。

4．指導者との事前打ち合わせ

毎年８月下旬から９月上旬に，保健所単位で実習打ち合わせ会を開催し，担当教員が保健所および管内市町の指導者に，実習目的・目標，学習の焦点，展開方法を説明している。そして，指導者の関心や担当業務，力を入れている活動や受け持ち地区の強みについて確認のうえ，実習テーマを設定し，それに沿って保健事業や家庭訪問を組み込んでいる。初めて地域に出る学生への地域看護活動の導入として，保健所・市町でのオリエンテーションが重要であるため，学生に身近な内容例を示すとともに，ベテラン保健師に「私の地区活動」の語りを依頼している。打ち合わせ会では，指導者同士で実習受け入れ準備について情報交換し，保健所指導者から市町の活動の特徴を実習計画に活かす助言を得ている。履修学生が確定していない段階であるが，学生のプライバシーに配慮して機動力や宿泊先などの情報を共有し，現地での生活を想定した実習計画を検討している。

実習報告会における効果的な学習支援事例の共有

1．企画の背景

平成26年度に，新カリキュラムの地域看護学実習準備のため，指導者との打ち合わせ会を２回開催した。学内での打ち合わせ会では旧カリキュラムとの変更点を中心に実習目的や展開方法について一斉説明し，保健所単位の現地打ち合わせ会にて，２週間の事業予定を踏まえて具体的な実習計画を検討した。

しかし，実習が始まると，到達度や具体的な展開方法について指導者から戸惑いの声が寄せられ，担当教員は現地で調整に追われる事態となった。指導者から実習終了後の意見交換の要望を受け，実習報告会では実習の変更点に関してグループワークにより指導者の意見を収集した。

その結果，本学の地域看護学実習と公衆衛生看護学実習の違いを明確に示し，実習フィールドの特徴を踏まえて展開方法を具体的に説明する必要性が浮き彫りになった。指導者の「実習を受け入れる以上は学生一人ひとりにとって良い実習にしたい」「実習生向きの事例や事業が少なくなった。他の保健師の協力を得るために実習計画を早めに共有したい」「看護師をめざす学生に保健師活動をどのように伝えるか試行錯誤している」という声に実習指導に対する熱意と責任感を感じ，相互理解のためのコミュニケーションの重要性を再認識する機会となった。

グループワーク後に，次年度からの実習打ち合わせ会と実習報告会の開催方法について指導者に相談したところ，打ち合わせ会は保健所単位で現地開催とし，実習終了後に報告会を学内で開催してほしいとの要望に集約された。その理由として「（自分の実習指導について）これでよかったのだろうかという思いが残る」「他施設でどんな実習をしているのか知りたい」「今年のグループの特性なのか，他のグループも同じ傾向なのか分からない」「他の指導者と一緒に振り返る機会がほしい」という声が挙がった。これらの背景には，保健師分散配置の職場環境で実習を受け入れ，限られた期間で実習目的に沿った学習機会を作るための組織内外の調整が難しいこと，実習指導経験の少ない中堅前期の指導者が増加していることが関連している可能性があると考えた。

そこで，実習終了後に指導者が学内で一堂に会する場の特徴を活かし，実習指導経験の意味づけに重点を置き，指導者が実際に行った効果的な学習支援事例の共有を試みることになった。指導者と教員が協働で行うリフレクションを意図した企画である。

2．事例の選定と発表者への依頼

実習の各クール終了時に行う教員ミーティングで，効果的な学習支援事例の発表候補者を検討した。全クール終了後に候補者を２～３名に絞り，担当教員から候補者に効果的な学習支援と捉えた理由を伝え，発表を依頼した。その後，報告会企画責任者が改めて発表者に連絡し，企画の趣旨と発表方法について説明した。発表では，これまでの実習指導経験や学生に伝えたい保健師活動，実習指導で大切にしていることを含め，学生・グループへの直接的なかかわりだけでなく，組織内外の調整における工夫についての紹介を依頼した。

事例選定については条件の明文化なく取り組みを開始したが，教員間で検討を進める中で，「実習目的に沿った学生と指導者の相互主体的な学習過程で，地域の強みの活用や組織内外の調整が含まれる」事例を挙げることが概ね共通認識となっていった。

3．事例発表とリフレクションの枠組み

実習報告会における効果的な学習支援事例の発表時間は一人15～20分とした。担当教員が選定理由を含めて発表者を紹介し，発表後にグループワークを30分程度実施した。グループは地域と職位，本学の実習指導経験等のバランスを考慮し，１グループ５～６人編成とした。リフレクションの導入として，①効果的な学習支援事例の発表を受けての感想，②実習指導の工夫，③実習指導を通して発見したこと（組織への影響含む）を挙げ，大学への要望を含めて自由に話し合いを行った。最後にグループで話し合った内容を全体発表で共有した。

4．試みの実際

平成27年度実習報告会の出席者は，指導者29名（県保健所５名，中核市保健所３名，市町21名），教員５名（うち教育補助者２名）であった。平成28年度の出席者は，指導者35名（県保健所６名，中核市保健所３名，市町26名），教員６名（うち教育補助者２名，ティーチング・アシスタント１名）で，次年度の新規フィールド上島町の保健師２名が含まれた。いずれの年も公衆衛生看護学実習フィールドである砥部町の指導者の出席を得た。

実習報告会の内容は，実習の成果と学生の経験と学びの報告，効果的な学習支援事例の発表とグループワーク，公衆衛生看護学実習の報告，次年度の地域看護学実習についての連絡等であった。平成28年度は，愛南町グループが「みて・きいて・つかんだ地域の姿」のチームプレゼンテーションを行った。

平成27年度と平成28年度に試みた効果的な学習支援事例の共有の実際をそれぞれ表１，表２に示す。

考　　察

1．効果的な学習支援事例の共有の試みがもたらしたもの

実習報告会における試みが，指導者，事例発表者，教員の３者にどのような影響をもたらしたかを検討する。

まず，指導者にとって，実習報告会で発表された効果的な学習支援事例は身近な自治体での取り組みであり，学生とのかかわりのエピソードや学習支援としての意味づけを聴くことによって，グループワークでの対話が促進されたと考える。

指導者は事例を通して自らの実習指導を想起し，移動中に学生と積極的にコミュニケーションをとる，事務所で電話のやりとりを聞く機会をつくるなどの多様な場面を挙げ，互いの工夫を共有し，学習支援として意味づけていた。What-Why-Howを活用した学生への具体的な指示のように，実習場面で取り組みやすい工夫が得られたと推察される。さらに，学生個人・グループへのかかわりだけでなく，指導体制に注目することによって，事業担当保健師や事務職員との協力など，指導者一人でなく組織全体で実習生を受け入れ学習支援する視点へと広がりが生じていた。指導者から「実習前に（発表を）聞きたかった」「発表資料を次の指導者に引き継ぎたい」という声が挙がっており，発表内容や配付資料が組織内で共有され，実習指導のガイドとして活用されることが期待できる。

平成27年度の発表で取り上げられた西条保健所の指導者研修会は，地域における保健師の保健活動に関する指針[5]に明記された保健所の「保健師等の学生実習に関する調整及び支援」役割に基づき，企画課保健師が管轄自治体の指導者育成ニーズに対応した事業化の例である。この取り組みの背景には，自治体保健師が指導者研修を受講しにくい現状がある。日本公衆衛生看護学会教育研修委員会の調査[6]では，半数の自治体が指導者研修会に参加しておらず，参加している自治体でも参加職員数は半数以上が２人以下であり，指導者の育成としては不十分な実態が明らかになっている。厚生労働省事業である保健師助産師看護師実習指導者研修は平均67時間（35～240時間）と長く，自治体保健師の業務特性に合致していないため，公衆衛生看護学実習の指導者研修プログラム２日版が提案されている[7]。今回，保健所での集合型研修半日と個別の相談的支援を受けた保健師が初めての実習指導に臨み一定の成果を上げた実績から，管轄自治体の地域特性や保健師活動を把握している保健所が指導者研修の一部を補完できる可能性が示された。実習報告会に出席した保健所保健師にとって，管内保健師の人材育成ニーズに対応する役割の重要性を確認する機会となったと考える。

次に，事例発表した指導者にとっては，自らの実習指導

表１．平成27年度実習報告会における効果的な学習支援事例の共有

構　成	内　　容
事例発表	**①今治市役所　住民サービス課（波方支所）　保健師　篠原知佳**
	選定理由：支所全体で実習を受け入れ、学生が地域に関心を寄せ、広い視野で地域を捉えられるよう働きかけていただいた。家庭訪問や事業の中で保健師の行動を学生に見せるだけでなく、タイムリーに学生の考えを引き出しながら専門職としての思考過程を伝える工夫をしてくださった。
	発表内容：支所での実習指導は初めて。実習指導で大切にしていることは、生活の場に出ること、病院と地域とのつながり、保健師としての私の考えの見える化である。波方に愛着をもつ支所職員に町内一周案内を依頼した結果、学生が保健分野以外の歴史やエピソードを通して広い視野で地域を捉えるきっかけになった。昼休みに支所の食堂で職員から地域の情報を得ることができた。家庭訪問では医療機関とのつながりを考えられる事例との出会いをつくり、対象者のセルフケア能力を高めるかかわりや見通しをもって地域で生活できる支援の必要性を伝えた。実習前半は保健師としての私の考え・判断根拠を示し、後半は学生の考えや根拠を聞いてから「私はこう考える」を伝えるようにした。学生一人ひとりの強みを記録でしっかり伝え、学生の自己効力感を高めるよう心掛けた。
	②西条保健所　企画課　担当係長　星田ゆかり、　西条市役所　健康医療推進課　保健師　梶原裕子
	選定理由：初めて実習指導を担当する市保健師を対象に保健所で実習指導者研修会を開催し、企画課保健師自らが講師となった。受講した保健師が学びを活かして実習指導に取り組み、ポイントを押さえた学習支援をしてくださった。
	星田係長の発表内容：実習指導者研修会で行った講義の一部を紹介された。以前受けた講習会で、学生には１から10まで言って３わかったら上等、背中は誰も見ていないし見たところで分からないと聞いた。指導者は学生と実習で関わる人達の間に立って「ツアーコンダクター＆通訳」の役割を担う。教育機関の実習目標を保健師間で共有しておく必要がある。看護師を目指す学生が実習を経て保健師を希望する可能性もある。若者の特徴を踏まえた育て方のコツとして、What-Why-Howをセットで伝える具体的な指示と小さな成長をほめる方法の例を紹介。実習でのあいさつや服装、報告・連絡・相談、記録提出などの枠組みの設定を確認し、学生に保健師としての思いを伝えることが重要である。
	梶原保健師の発表内容：保健師経験４年目。初めの実習指導で２グループを担当。実習準備期間に、保健所での実習指導者研修会の受講、実習打ち合わせ、事業・訪問担当者や関係者との連絡調整を行った。連絡調整を行う中で、普段接する機会の少ない上司と話をしたり、先輩から指導のアドバイスを得られたりしてうれしかった。自分の学生実習で良かったことを取り入れ、「指導する」よりどうすれば「学びやすくなるか」を考えて取り組んでみる、学生の取り組みをできるだけ確認して学生に返すようにするなどの目標を立て指導を自己評価した。学生と一緒に地区踏査する中で地域の新たな発見があり、顔つなぎや地域に出向くことの大切さを再認識した。
グループワーク	〈発表を受けての感想〉
	• 実習前に聞きたかった。 • 準備に時間をかけることが大切 • 事業を入れすぎなくてもよいと思った。 • 事業担当の保健師につなぐことが重要 • 「（学生に）1から10まで伝える！」と聞いて、昔の考えではいけないと思った。 • 学生へのネガティブなフィードバックはどのようにしたらよいのか悩む。
	〈実習指導の工夫〉
	• 実習記録に必ずコメントを書くようにした。 • 移動中に学生の話を聴くようにし、保健師のやりがいや大変さを語った。 • 年配保健師に活動の歴史を話してもらった。 • 若い保健師に保健師を志望した動機を話してもらった。 • 行政職に町の紹介を依頼する際、学生の立場や実習についての説明に時間をかけた。 • 医療との連携に注目してもらうため、学生と国保診療所を訪問した。
	〈実習指導を通して得た新たな発見〉
	• 地区組織へのインタビューで学生が地域の強みを聞き出してくれた。今後の組織支援に活かしたい。 • 学生による自主グループへのインタビューを通して、現在の活動の悩みや困っていることをつかむことができた。 • 母子中心の保健活動になっていたが、高齢者について学生と一緒に調べて実際に関わりをもつことができた。

※敬称略、グループワークの内容は抜粋したものを記載

表２．平成28年度実習報告会における効果的な学習支援事例の共有

構　成	内　　容
事例発表	**①鬼北町役場　保健介護課（日吉支所）　保健師　岡崎あずさ**
	選定理由：地区での健康学級や巡回健康相談など、学生が地域に出向く指導者と行動を共にし住民と触れ合う機会を作っていただいた。家庭訪問は指導者以外が担当し、係の保健師と学生との座談会を開催するなど、保健師全員が協力して指導してくださった。
	発表内容：実習指導は２回目。１回目は事業を多く経験できた半面、地域特性が見えにくかったため、今回は日吉支所の1地区に絞った。実習指導で心掛けたことは、実習計画を係全体（保健部門の保健師全員）で考える、住民グループ・職員・学生等との連絡調整を綿密に、（学生に）答えは教えないけどみるポイントは教える、（実践の）あとでしっかりと解説する、（網羅する・理解する・実行することを）よくばらない、とにかく楽しくのびのびとしてもらうことである。実習指導は地区住民の生活ぶりや思いをじっくり聞く機会になり、歴史や文化がコミュニティをつないで、地域に暮らし続ける原動力の大きな要素の一つになっていることが分かった。他の保健師が家庭訪問を担当したことにより、学生を介してノウハウを学ぶことができた。日常の業務に改めて保健師の専門性を見出せた。
	②新居浜市保健センター　保健師　河村千里
	選定理由：今年度２グループを担当。前半グループの指導経験を活かし、後半グループへのアプローチを工夫していただいた。自作の地域ノート（校区の情報を一元化したファイル）を活用し、学生が地域へスムースに入っていけるよう支援してくださった。
	発表内容：実習指導は３回目で本学は初めて。担当のＡ校区に異なるテーマで２グループが入った。成果物「みて・きいて・つかんだ地域の姿」を比べると、前半グループは事業のつながりの確認に終わったが、後半グループは保健事業の展開を全体としてとらえることができた。違いはなぜ起こったか。前半グループは初めての実習（領域）でおとなしい学生たちだった。学生のみで公共施設中心の地区踏査を行い、他の業務の都合で自分から時間をとって校区オリエンテーションができず、地域ノートを学生に見せたのは最終日であった。反省を踏まえて、後半グループには２日目に地域ノートを見せた。公用車で校区内を回り、現地で説明し家庭訪問途中に補足した。一度きりの実習！学生の知りたいタイミングを逃さないようにかかわった。実習指導を通してＡ校区の住民が自分を認めてくれていることがわかった。Ａ校区が大好きな自分に気づき、保健師は楽しい仕事と改めて思えた。
グループワーク	〈発表を受けての感想〉
	• 学んでほしいことを指導者側も明確にしておかないといけない。 • 係の皆で計画し、方向性や到達点などを共有できて良いと思った。 • 実習目標を理解して、事業等で関わるスタッフにも伝えることが大事。 • 「背中を見て育て！」という視点を捨てきれない。 • 「答えは教えないけど、ポイントは教える」は名言。 • 地域ノートを作成し、地区をしっかり把握されていると思った。自分の仕事を振り返っておく必要性を感じた。 • （自分の指導は）説明が主になっており、学生の理解度の把握ができていないことに気が付いた。 • あたたかい気持ちで学生に関わっていることが分かった。 • （指導をふりかえって）学生に地域の良さを分かってもらうという熱い思いや楽しさを伝えられるとよかった。 • わかりやすい発表資料だったので、テキストとして利用し、次の指導者に引き継ぎたい。
	〈実習指導の工夫〉
	• オリエンテーションで保健師になったきっかけを話した。学生の反応が良く、場の雰囲気も和らいだ。 • 新人期保健師とのランチ会をもった。年が近く共感しやすい印象だった。 • 地域住民との触れ合いを多く持った。 • 子育て支援や地域包括にもオリエンテーションを頼んだ。 • 事務所の中で電話のやり取りなど聞いてもらった。 • 実習時期（ローテーション）によって学生の経験値に差があることを頭に置いてかかわった。 • 何を学ぶかぼんやりしているので、こちらがうまく引き出せるように「何が見たい？」と声をかけた。 • 学生が「保健師もおもしろいかも」と感じることをゴールにしたら気楽になった。 • いいところは（学生）本人に返すようにした。"
	〈実習指導を通して得た新たな発見〉
	• 学生のインタビューによって住民の率直な思いが分かった。 • 業務分担制なので、なかなか把握できない地区の強みを知ることができた。 • 学生に今後の展望について確認されることが多く、改めて考える機会になった。

※敬称略、グループワークの内容は抜粋したものを記載

経験を効果的な学習支援として意味づける機会となり，「顔つなぎや地域に出向くことの大切さを再認識」「日常の業務に改めて保健師の専門性を見出せた」「保健師は楽しい仕事」のように，リフレクションによる看護職者自身の内面的変化[3]とされる，自己成長，看護実践への自信，仕事のやりがいやケアの糧，楽しさ等が生じていた。他者のエンパワメントを支援する前提条件は支援者自身のエンパワメントである[8]と言われ，実習教育においては学生の学習を支援する指導者自身がエンパワーされる経験が重要である[1]。実習報告会での事例発表経験は，実習指導を導く日頃の保健師活動への深いリフレクションを促し，エンパワメントにつながったと考える。

最後に，教員にとっては，効果的な学習支援事例の共有を通して，実習フィールドの地域特性や職場環境に合った実習指導の工夫を把握する機会になった。そして，「答えは教えないけれど，みるポイントは教える」「学生が『保健師もおもしろいかも』と感じることをゴールにする」のように，指導者の印象に残る説明のヒントが得られた。これらは，事前打ち合わせなど，短時間で指導のポイントを示す際に活用できると考える。

2．協働リフレクションの意義

目黒[9]は「指導者講習会を“本当の指導”につながる学びの場へ変革していくためには，授業デザインとならんでもう一つとても大切になってくるものがある。自分の行った実習指導を振り返って確かめる，すなわち『授業リフレクション』である」と述べ，授業デザインと授業リフレクションの分かちがたい関係を強調している。

看護系大学が開催する一部の指導者講習会では，授業デザインと授業リフレクションを取り入れた演習が行われ[10]，教育機関主催の看護教員と指導者の授業リフレクションの試み[11][12]や大学附属病院における指導者のキャリア発達支援としての「実習指導体験を語る会」[13]が報告されている。しかし，これらは医療機関の指導者を対象としたものであり，先述の公衆衛生看護学実習指導者研修プログラム２日版[7]においても実習後のリフレクションは含まれていない。本学の地域看護学実習では，保健所単位の実習打ち合わせ会が協働で行う授業デザインの場であり，実習報告会が協働で行う授業リフレクションの機会の一つと捉えることができる。

リフレクションに他者を活用することについて，中原ら[14]は「他者との対話の中に埋め込まれた内省」の重要性を指摘している。近年は，経験学習の社会的要因に関する研究の発展により，内省を担う単位を個人レベルで考えるのではなく，複数人によって担われるものとして位置づけ，集団レベル，組織レベルで実施されるべきとの主張がみられる[15]。実習報告会での協働リフレクションは，愛媛県内の自治体保健師であり指導者という共通項をもつ集団レベルのリフレクションであり，地域の実情に合った実習指導の実践知を共有できる貴重な機会と考える。

自治体保健師の専門的能力に係るキャリアラダー[16]はA-1からA-5までの５段階で構成されている。人材育成の項目において，プリセプターはA-2，後輩育成はA-3に位置づけられているが，実習指導に関する能力や目標の設定はみられない。今回の協働リフレクションでは，指導者が学生の見学訪問を他の保健師に依頼したことで「家庭訪問のノウハウ」に気づく，新任期保健師が学生に保健師志望動機や活動を語る交流会を設けるなど，実習生の学習支援が組織に新たな育ち合いを生み出すことを共有できた。実習指導における多様な役割を整理することにより，新任期から実習指導の一部を担当し，後輩育成力を高める方策を検討できると考える。保健師分散配置の職場環境でOJTに実習指導を位置づけることにより，育ち合うしくみづくりを推進できる可能性がある。

3．今後の課題

実習報告会における協働リフレクションの発展に向けて，運営面では，リフレクションを促す問いを設定すること，グループワークのねらいと枠組みを明確にするオリエンテーションを行うこと，グループワークの内容を整理して指導者にフィードバックすることが重要と考える。

リフレクション評価の試みとして，平成29年度は効果的な学習支援事例の発表者から発表準備の過程や発表後のグループワークで気づいたこと，次の発表者へのメッセージ等を収集することを計画している。今後は指導者個人だけでなく，組織への効果を検証する方法を検討することが課題である。

自治体保健師の専門能力は状況依存性が高いため，限られた実習期間で初学者に保健師の専門性の理解を促す教育方法が課題となっている[17]。今後，効果的な学習支援事例の選定では，指導者と教員との連携や保健所のオリエンテーション，カンファレンス場面での支援に焦点を当てることが重要である。

今回の試みで得られた実習指導の工夫の中には，捉えにくい保健師の専門性に着目した実習生の学習過程の構成要素[17]に含まれる〈状況に身をおきやすい学習環境〉〈主体的で生き生きとした住民との交流〉〈保健師との対話による専門性の確認〉と共通する内容がみられた。指導者の地域ノートを活用した地区オリエンテーションは，視覚に訴える資料と生の語りの組み合わせであり，保健師ポートフォリオの活用可能性[18]を支持する取り組みと考える。今後，多様な学習支援事例にみられる実習指導の工夫を分析することによって，地域の実情に合った指導スキルを明確にし，実習指導アイデア集を作成で

きる可能性がある。

結　　語

新カリキュラムへの移行を契機に実習報告会の企画を再考し，平成27年度から効果的な学習支援事例の共有による指導者と教員の協働リフレクションを試みた。その結果，指導者，事例発表者，教員それぞれに意義ある手ごたえが得られた。今後も指導者と教員が協働で行う地域看護学実習の授業デザインと授業リフレクションを積み重ね，実習指導の実践知を共有し，地域の実情に合った実習指導アイデア集の作成に発展させていきたい。

引用文献

1）田中美延里（2015）：教育環境（人的・物的）の重要性.「経験型実習教育」. 安酸史子編，p.26-31，医学書院.

2）田村由美，津田紀子（2008）：リフレクションとは何か―その基本的概念と看護・看護研究における意義―. 看護研究，41(3)，171-181.

3）上田修代，宮﨑美砂子（2010）：看護実践のリフレクションに関する国内文献の検討. 千葉看護学会会誌，16(1)，61-68.

4）野村美千江，入野了士，田中美延里，他（2016）：中山間地域で住民と協働する力を養う公衆衛生看護学実習―愛媛県立医療技術大学の取り組み―. 保健師ジャーナル，72(6)，456-462.

5）厚生労働省（2013）：地域における保健師の保健活動に関する指針. 厚生労働省健康局長通知（平成25年4月19日付け健発. 0419第1号）別紙.

6）浅井澄代，岡本玲子，酒井陽子，他（2014）：教育研修委員会報告. 日本公衆衛生看護学会誌，2(1)，61-65.

7）浅井澄代，岡本玲子，酒井陽子，他（2015）：教育研修委員会報告. 日本公衆衛生看護学会誌，4(1)，55-60.

8）野嶋佐由美（1996）：エンパワメントに関する研究の動向と課題. 看護研究，29(6) 453-464.

9）目黒悟（2017）：教える人を育てるとはどのようなことなのか―新しい実習指導者育成の方向―. 看護展望. 2，4-18.

10）久保幸代（2017）：指導のあり方を考えるための実習指導者研修会. 看護展望，2，40-43.

11）永井睦子（2012）：看護教員と実習指導者の授業リフレクションに関する研究―イメージマップを用いた取り組みを通して―. 日本看護教育学会誌，22，学術集会講演集，172.

12）山本美子，那須敏子（2015）：看護教員と実習指導者の授業リフレクションに関する研究―互いの経験を語る意味―. 日本看護教育学会誌，25，学術集会講演集，187.

13）近藤ふさえ，堀込克代，濱口真知子，他（2015）：臨地実習指導者のキャリア発達支援―キャリア発達プログラムの実践と評価―. 順天堂保健看護研究，3，21-32.

14）中原淳，金井壽宏（2009）：リフレクティブ・マネジャー. p.171-223. ，光文社.

15）中原淳（2015）：経験学習の理論的系譜と研究動向. 日本労働研究雑誌，639，4-14.

16）厚生労働省（2016）保健師に係る研修のあり方等に関する検討会　最終とりまとめ～自治体保健師の人材育成体制構築の推進に向けて～. http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000120070.pdf

17）田中美延里，奥田美惠，豊田ゆかり，他（2012）：捉えにくい保健師の専門性に着目した実習生の学習過程. 四国公衆衛生学会雑誌，57(1)，85-92.

18）田中美延里，奥田美惠，窪田志穂，他（2016）:保健師ポートフォリオを活用した臨地実習指導者による学習支援とその効果. 日本地域看護学会誌，19(1)，40-47.

要　　旨

新カリキュラムの地域看護学実習開始を機に，平成26年度に指導者対象の実習報告会の企画を再考した。平成27年度の実習報告会から，実習指導経験の意味づけを重視し，効果的な学習支援事例の共有による指導者と教員の協働リフレクションを試みた。2年間の試みの結果，指導者，事例発表者，教員それぞれに意義ある手ごたえが得られた。効果的な学習支援事例の共有は，愛媛県の自治体保健師であり実習指導者という共通項をもつ集団レベルのリフレクションの機会と考える。今後も実習指導者と教員が協働で行う地域看護学実習の授業デザインと授業リフレクションを積み重ねることにより，実習指導の実践知を共有し，地域の実情に合った実習指導アイデア集の作成に発展できる可能性がある。

謝　　辞

地域看護学実習報告会において効果的な学習支援事例をご紹介いただいた保健師の皆様に深謝いたします。また，会の企画運営を支援してくださった教育補助者の八束育子様，戎居百余様に感謝申し上げます。

利益相反

本報告における利益相反はない。